紫式部日記註釋 一

915.35-Sh49ウ
1200500758504
915.35
49

始

紫式部日記註釋

井上通泰

915.35
SH49

露光量違いの為重複撮影

松の屋藻井大人
清水宣昭大人 著述

紫式部日記註釋

東京 光文書房

24.3.29 帝國圖書館

紫式部日記註釋 上卷

いかゝへのゝ
ぬかゝ
えしむ
てやさ
あとの
好ましかり安らんに

露光量違いの為重複撮影

J 14 3

松の屋藻井大人
清水宣昭大人著述

紫式部日記註釋

東京
光文書房

915.35
SH49

紫式部日記釋序

いとゝしのみそうさふかなれはあるにひとう
ぬしはしるくすまれしうら上はは武部とゝ
えゝむらはしるは神君かくまし芳原氏部
てやうこのあはたうひとゝやしう
あるのうゝそとゝる書こしあまるこうるにれう
れはしるは安うん此君の日記はもゝ可

しらねばいくさのみやすからずゆゑなきや
とふ人あれども書なくてあはれ文こそ
うるさくもあんなれ物のかたりもあり侍こもと
よむてきいてもあはれうしろめたきことなれ
このかたうれしき回しなのるかたれわるれ事
かたはしはつたへたるこゝろあり事なきの
あもはかりもとちうはくもてあり事

かたうしてよみなれさうく可あり
ふしあれ世の人乃ちゝ侍えか
てよみなるこゝろうんこゝの回ちるしるも
て世を事尾張人信れ宣眼もてをおこし
事こゝ一日紀よむたりとゝ侍る信ふ書と
とうれ菖花物語をそしめるゆやれやと
ゝろく老人吳おとゝいふをれをも好くちう

いにしへくさぐさのふみどもをはじめ
うちまぜ一ふしづつをもそなへさし言葉
おのづから説をとりてそのくりへなり
しかるに紫式部日記釋といふ書あり
くたるはかりしにいとにたるこの人は
おなじ事をのべるなり中比紀ふと
ときそしうよみあらはしたるうち

そいとすぐれたるはつゆばかりもなんはべるうちに此よ
うな紀の文をはじめとしてよみあつ
とさまざまの一くいをしるしあつめる考あり
あるこの此釋を人紀をえあつめてする
かうな紀ふくに又はぶとにうめたる文のんを
よいとこそやうにおえれしをあと
あのあめかなる 先代さお書のなるある

とゝろそうしゐつゝあまりゐもとはをかゝ
ゐはこゝろくもゝ分へとめるゝはけたるを
なのづゝをしゝうきめるゝを

をゝうゝ弄や

天保四年乃春

松齋藤井言為

紫式部日記歌

凡例

これ日記をゝはたはくあがつゝめる事。今世に流布せる本。二種なり。ぜんぜんをゝ又は。侍従中納言と。中ごろ。

きゝの頃又申れを。ちうころ以てきたる。群書類聚本と。植松茂岳うもを本。宗中とこれをもをあをて。ゐの注歌をゝのしなるなゝ。はれと。れんにゐやをゝ本こをたはをれ

と。若やをゝ本ほとは。いうをゝせん。さてこれは紀。源氏物語をなふ。ゐよ

ゝなゝん人は。注歌にあれらゝ。注へてもをゝちゝはくい。初学

ゝ人乃ためにゝ。をれ。識者のたゝをゝのゝゝ孫を。源氏物語をゝ。ん

たゝ今海内人民たのにとそなん

○注釈にそは中にそくゝしく侍るを今此俗語抄訳して此は
よなくさてとかゝをたらいはすして俗語抄訳して此あるたゝにて
書風ところ〻訳をゝとゝるへし侍る訳して此風とゝろかゝてを俗
語をこの風はゝれるたゝにそゝけるこれほゝかり此侍ゝ風なに侍
注中此海をゝ海をゝろきは名ゝてゝたゝ風をゝ又あゝなゝれのゝくをゝなるを
又るにいとくゝしとけをゝゝみたゝゝかゝゝゝれとなにもくゝこれ初学のゝをや
すゝゝんなゝとゝしわさを

○源氏物語五十四帖は此をゝれらくゝなるゝゝ侍れをゝゝけくゝ乃
中に引をゝ此書にをたゝ書名此ををあけて

○官を此をゝ此風侍ゝをゝ人民為をゝ風ゝなゝは此をくく侍注中にゝれ
と拜書類聚中とたゝるとゝひゝとゝなゝゝとゝ風とは此をゝ中をの事に
此ゝかこれ此外侍注中にをゝるたゝれゝるゝこれ注釈ゝは省きていそに海をゝ
此官位乃をは侍注中乃書ゝ我たゝれたゝを又をゝ又注釈ゝうち侍注中
を 侍本 拜書類聚中を 家中 家中の事を 事とのこゝけゝ

○こ此此者此系ゝは侍注中此をゝめにをゝたゝなゝこれを安茂為吉
此業家と論ゝ風ゝを海をゝゝけ風此此なゝ此れは今物とゝるゝと
此安茂此今物をゝあれゝを又業とゝれ注れゝ名のゝゝなとは源氏
物語乃法狀ゝ此ゝ様なとに妻ゝれは此くゝしくゝはいをゝとゝれのゝを
書風中は注釈此ところにゝれを此ゝ此をなにもくゝ文の云にあゝゝ

ぬとは、これをいへるなり

○裝束などといふ一へとは、つきくさぐさの風なるを、淨土女の紫衣なとは、法衣袴などの風をえ風のまにまに、をしくをもをさに、えらきれそ、妻〜きき所なとは、いとそられきんされといそそえあるぬるとうはうにえたるを考へていさゝかのつきの強を大うる傳ふるをり、洞度ア氏氏をしうをこれすち乃妻しに、ふいきなる〜ん人を有職家につきて、ふそしきは所はをきいきうしと紙

○法師法師、俗、俗なとうくつきを、法、俗、ものをけるところハ、今以つくを、法〜く文まをうてうけが文をつくつきところにのをしをうき或は、うふきとろに省きなるたふい、今とくくあるためをうけが

○これちう法くよ、わるをへのためふは、すをしをたにふ風ア、あとをきれなれと、かとうがいふふいなくいきう、あをたんれしわきみをいうたにひうことはほうう〜んとれは法つうなきにこれ書のしたるを師、君のなをへに法〜せなるにれは、しうれるをとうをとうををてう法〜を師のいをれしとをきう〜なか師とハは、吉俗乃をとれ中の京氏張の松の屋氏茂中、大人

文政十三年九月四日

尾張　清水宣昭

紫式部日記釈一の巻

秋花まさりの巻は御門院のありさま御れうの

たゆくをり

さは六十六代一條帝紀寛弘五年紀こと記りさらはこの九月後一

條帝うまれ給ふをもてさたむへし日本記畧寛弘五年

九月十日戊辰ゑ々時中宮於左大臣土御門第御産皇子第二

親王也とゝ

ア秋花まさりの巻は御にと以るは七月紀そめ紀ほとなるへし

まさりは氣なりまさりはくさ〻にまさりなるまさりと同しふさへの

なりさしはげそ氣なしとも言そひと以はたゝふ氣と以ふとはすこし
ふそへ実ゆり文てそ侘たゝひつまれほ古文をくらみてさとるへし
さて市門後はこのひの中文（侍名彰子にくしたろさせ給ひてのち上東門院ときこえさせに）の侍従の道長
左大臣北の家ゆり（日本記略百錬抄なとをうしはたもしろきことれとの今
つきはふふしみそ出そてをを以り）このことおのつ侍ふ田中道麿ら侍
むゆうたそ於うし笑ふうたそ者をうしなりとれへるをこつゝをうへな
ひてらしとれそしたまとこの云は（ホハル）称美と可笑（ワラフ）とふたつふとたりてうな
はふつまと者をうしなりと侍のれそれたるにらりていゆはふつくもくを
うしとうけりなほ石原正明は蜻蛉日記なるれうにつしれをうゝ
ら侍しとふふ寄につきて称美のうたも者のこのなりとれへりしら
しつきへきたるうへに森和歌は曾丹集なるうはそをとはそ侍ゆむ
物のそれをうそ和歌を者うしとをうてなるむれといつをひきてほ
むるとゝらふとふつうをたまるゆうしとたまはゆれよつけて
よむゝ侍の続はあゝ侍りなうへし
池乃とたりのこはそよやそれのほとりの美むゝたのゝどいろつ
きとたりておほるこの美をと元んなるにまそきふてふだんのれど（艶）（讀）
きをうの美くあそれまさうゝ（経）
後のゝちのあうゝ侍なゝおのゝそそ他をゝうはそゝうゝのうへのとに
のそもれすることをふへゝむのゝ根にめくそれくにとりてゝなりとあ
ゝふゝへふ不断そたゝはの美をくゝ秋のそしゆつる美ゆりの者

えんなる中にもそやうまさ、きこえたる後徑の声をもて
うゝあるれまさるとなり。不斷の四後徑は中文序姓分の徑となれ
ハ山祈のためなるへし
やうゝずゝしき風のゝきわたるとまんの音えせぬ水のおとなひまさる
らさて海うはさる
やうゝハやくの音俊ようめきそうたるなり。言は。シダイくニなり。まんのは。
イツモノなり。おくの水の音なれそうみのやうに水の音なるへし。やうくて
しとゝ山ゝふくふく風い音とおのつゝ耳にきゝへくなりぬれい表
もはゝゝつをきなれるゆゝ水の音にて海うそさる　となり
音なれ　鄭玄　とに音なんとにうくては。まうそさるとわうそはと

とのそに
花里ゆをちうゝはちゝふんこさるなれ物ゝうするをさおしめ
いてなやきうおそゝきにへらめるをはうけなくまてゝくさせ給へり
花里とは中文の四巻まそこうをゝくうやをひそ中に何くゝ花へ
ゆゝのそはさゝしのほへ係まうゝ人こは如房まなり。おの人このトに
のゝをいれそうへし。引ゝれもキトセヌとゝ山ゝナンテモナイとゝふ
音なり。物ゝうは。ハナシなり。分や師うゝは序姫分の徑となる
まこそなり。引ゝけなくハ。然有氣なくそなや師ゝ音をなゝは
中ふ序分をもてゝゝ音を給へるなり
れあゝ海なものいとさゝなることなしとうゝせのなくさあうは。うるれま

へをこそだつまうまわるへうしとうつしんをはひとたくんたしへを
くよろつまうまにとうつそあやしき
いとさうなることなれとはさのかうはあうさ海なるを今はしうしん
てとうくやはうをいとたよりぬとれと程たゞ法えわうでとうつえ
を省きて以へるうそはふうさ海なるものすれさせ法つるをにあやせるを
りうたよは憂世の言なり うつしんを現んそいを我人の意にお
ぼろけなるゞ深く思はとうたるんをいひきたくさとは深く
みとうるんをへわきこんてこの武蔵りんきゞ佛のそこふかく思ひ
以うてうるをしらひなそなのをしうあさ海なれはしう佛のそこに
思ひいるうつしんをはひたうてはをへなる法とそはあうさ海なるの
すれを張へるにようそよろつうたるまうしれぬとなり うつそあや
しきことはさえうこされしく思ひいたるんのたうふをうくめてたきあ
なうにつきそはとうなうなうを海さうきへいあやしうとるなり たと
しへなくはタトヘンカタモナクなり あやしきのさとしい術を師いあや
しきこととふ歌息の言をふくめたるなくといきれたり
きゞ東ふうきほうの月はしうとうを本のしたをくうきにれこうしう海
ありなきを如宿いんをきさふあうきし花人をれなと以ひ出ろふ法ふ
法東のうをうちたとろうし あゞんのれゞほう的そうあり
れううしうを如房なうの何なり 如宿いんはううしなるのうをする如房
なり 花人を如花人なるへし 以ひしうろそうれこれの人の以ひあふを

又は法華は実相なり。ぐんの五ぞくは情ゆに不動。降三世軍荼利
大威徳金剛夜叉等の法なりとは行者の為なり。六の
ほうも壇の修法百壇の修法とつかを業花勧進に尽したり。時は
しめつとそげむへきはいなりて序修法をそめたるなり
秋々くとうちあげたる伽藍の声々とほくちうくきてきこえたる
法とおとろくしくたふとし
出とろくしくい修法する僧とものの声の勢じたてしく少ゆるさ間なり。
たふとしはスショウニアリガタイなりと玲水朗詠いそれたり
就寺流の僧正（餘慶）じんしの法ん法。廿人の伴僧をひきゐて（加持）れうぢ間
ねを法ふあしたとろとのくそしのとぐろくとふみなりはるは法へ堂。

おとくの事をいうはふぬ
寺ふは對屋（タイノヤ）なり。ろくとのそしはむなとうなるへきろくたた
しなる度の橋なり。どろくはふなりはるは見の高なり。あとくは。
寅年そ。他の事の子面うは帆だとふへるゆて。ふみの如とろくしく
たふとしとふる僧なりまたにひぐそたり
法住寺の座主はう面そのたとく。適（昭寺）ん（馬場）ちしの僧都は。文殿ふあなとにう
ちつれなる浄衣するさゆて。ゆるくしきうそしとをそうつく。
本の面をそけてふりふる法とまるるにふゆうそあちしてあそれ
なり
座主。数年の僧侶に院源とたさて文度なりて。馬場度をまと

めて法住寺の殿にハ馬場殿に角ちしの御部屋文殿なとにと
いつ云なりさてなとにてこのりゐへ係れり浄衣ハ法衣なりずうた
まてのまてにあそれなりへ係れり又ゐにゆはゆを組りにまあし
うさいうへりゐへ係るなり申ゐくしきえ三サイラミキなりうそしは
庫めさたる浜屋の指なりあそれいとんふらくめて慈ずるまあ
るおていなる歌きの戸なりさとはゆの山指をこえんあへし
清禅イ
さいさあるうと大かくをうやまいておーやうあう
大威徳いたの山壇のうちの一所をうこのまへをうまてこの阿闍
梨の勝を庫めて礼をなしたるなり
人々まかりつれは秋をあけぬ

たの人々はあに如宮はいまゐはうしとあり如宮とあて御まへの女房
まなりそのうれこれの如房まの御房へまあたるに秋のあけたるな
ア上うのつきまてはいかに御指とを巡るやうなれとこれをあたら
へりゐとあれをあなへうへアーてさいれをまてとは巡ゐさすへ々しとな
かりとはいまーあれをなり
また屋の戸ちのつほまにつゐゐせはほうちまうたるあーたの家も
まさおちぬ小屋ちうを指山てこずるじんやーてやれをうませ
指人
局は部屋なりほのうちまうたるはボウワとしたる七月はのあーた
のさまなりまさおちぬふとは秋の明るさのつくそやほとなり屋

八この年文の序文出て東三條殿勇家公の御子序名道長世に序賢関白太政大臣なり下れおそしの高くなるをたゝへしのいとうはうなるを一枝をゝせ給ひて九丁のうゝよりはしのをゝを給へうれさ面のいとをゝしけなるに我あはうほの品しきをゝれハ度内うれおそくてはをゝうんとの給さるにことつけてすをのをとにをゝぬ

をゝハやうかゝをゝたる增をゝいとうはかくべつなり此面の八道さ公のをゝ　をゝうしけなるハをゝうのなり度のれあゝさ面のすゝれ給へるにをゝて我方のいとをゝうしけなをゝ給へうのりハるなゝしと玲本義いまれをゝおはうほハおーたの所と海さけきなよせぬほをいふ品しきをゝれをゝこゝとつけてをゝよりぬをゝへ係ゝ永れおそくてはをゝとはこの御系の奇よりへくおもむけ給ひて書くてはをゝわーしをゝ言をゝ言をゝれをゝしゝの給ふにとつけてをゝをゝ

ゝをゝき新新をゝをゝはんとをゝ言をゝへなるをゝうのをゝにをゝうをゝて奇をゝをゝをゝはてをゝをゝいをゝをゝる

をゝをゝへーはゝの系をゝをゝをゝに系のをゝれをゝ新ゝゝれ

この如御系の御をゝはゝつをーきは系のおをゝをゝをゝをゝへーをゝの

をゝつをーきはゝの系をゝをゝをゝに我を女のをゝれへーをゝにをゝをゝと

をゝをゝへをゝをゝきは系のをゝへをゝをゝて我が系のおゝ女をゝ

をゝはれをゝ系にをゝへをゝをゝれをゝ我分をゝをゝはのをゝ

らるゝとなり

あなとゝ。はるゝて。すゝめしゆつ

このあなと。歌きの戸なり。とは。疾(ト)ゝ。ふゝ。ゆゝ。疾(ト)くゝ。みゝ。

とゝれとの。ゝゝ。ゝゝ。はるゝ。微笑(ホヽエミ)ゝて。ニワコウとゝてなり。まゝ。視

めし。ゝ。ゝ。ゝゝ。ゝゝ。

ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。

とのほとゝいとおとなしくゐふるさ所にして人を殺おろす人をこのたゝさゝのなれなと世の和うろう夢くとしておそれる事をはなし
と人のあをつりさこゆるとあしゝられとおろうけふる事
とのほとゝいの云正慶三年誕生と大嘉永元年に死去して実に六年十七
歳なり人わかさは才気カシキなり人を殺さ信義の和なり主師
うくなほとゝ言のゐるうち人は自分のすられたるとい人をの
をうさをとんとをあうるに今世のうなをの人を殺
なきもとゝけるむしろ人のゐへるとうくゝ人をもう人をとうゝ
さの殺人をゐふるさはをなるむしろ人のきやに比へるとは自分代よ
ゝさるなるわうふに人をにうをゐ比へるなり

とゝいたなり殺をやハう或はっとデモなとのふゐるく世の和うろうは世上ノ
ハナシなり夢くは夢やうの夢と同ををはるうしうぬさ所なりを
さなりとゝ文のおをてゐをされもつをにあをつるとい比へたるる
ゝをとうる死を年齢の若き所とゝいるうゐやふるさハ今世になる
らへををゝしあしいあやしなるへしとを殺本義をわるうるうけと
ゝ和いおにはさ所のほをろうしけるにとあると同しをとこの若のほあう
さ所のすられたるにをて我分のをるうりなるなるゝ和ハ若の事を
うちとりぬ所をて出戻るのべにとうちずんしてたちをひにしさ所を
をのうたりにほめたらをとゝのあちうし伯母ーうはうのをのうちれ
をひいとゝるをゝ殺のをうはをうをゝをのず死ぬれはをすをを

あるはかうなる歌

うちとけぬほどは女房ともとおもうぶちとけぬほどよろしきほどにて

そのをこなりなりぬるのべかは文集秋部小野良材

なりこれへしおほる時をこにやうせはおやなくあこの名をやたちなんと

あるおのの白をすこし引ちくお房ともの中になるわせはおやなく

ゆさなる名をやせにたてこれんとうこれなりよのうたくい竹丸う

つほ以下種々のあれ書なくしかはうのことはさしよんとおもへきほの

ことなくぬをいへるのなりうきはさしよなきことふむうてきりきこと

ををなりうこれほにようこれはるは人のんとうへはいるるをの歌

よなくい所うくこのこ信君のさ海ことぞれとくをうくほゆをいひ岩

らうへきこなりはうをこそうのこちいひいうるぬくといへうはをこと

をおのうくほゆるハへきようくしとてうんしらひゆをあうるる源大

あれをくこしへうをうへしいなしきこ式部のふうきようんあうこをといきれ

たり

きうほのうこおのうけうばしけこ月あううきほふほうくのちふうこおこんの

さほなここれをへしうはけうくなをゆるくしこしてきほのほこうの如

にうきこせたり

播磨守家平の侍従と行成とは碁の負をうちとは碁にうちほけた

る人より馬ゆあをゆうてて人をを食癒するとばなり六月の競馬

にあるこうこて文徳天皇實録天安元年十月乙酉右近衛右兵衛右

衛門・三府・並右馬寮等・大設宴會・貢献酬・仝五月六日競馬之
須也とぞ・この頃・三代實録・貞観四年十月・同・貞観六年十
月の條なとにも・てこれは・恒例十月にあることなるし・拾遺抄に
見たり・また・日本記畧・應和二年八月廿日乙巳・今日殿上侍
臣・設和歌・負態・仝五月庚申・夜男女房献和歌・男方負・仍
所為也とあるは・斎のまけ・なり・褒ぎにつひて・右まけに・なり・二日は
うあて・中おまけ・左・勝へ・とくしは・あるなるひ
ようことも・まけ・なとさ・同く・おそ・ふと・俗の人を・招・くめして・文
なとつくる・せ・ふとあるは・顔ふ・だのまけ・はなり・こ・ひに・なる
へて・表の負態の・ひ・をとおとつへ・さて・抜のまけ・ばし・けり・日

うるめに・城里亭へ・同ぞ・そ・日るそのちに・ふ・ま・ひて・そ・ぞう
の・表裏の・同なを・見・とな・あるなり・あるさ・同・ふ・ひ・あなり・ま・そ
くは・同・按に・机の・ほなり・厳・の・件なり・又・朔日・按・に・表の・ほ
なり・ほ・の・件・なるなと・見・て・その・用は・あを・盛・ひ・の・器・う
すを・同と・同く・あを・載する・机・を・形の・浮・漢なるよ・し・ふ・ふ
けたるなる・へ・今・高・ほ・ふ・ふ・ふ・古・れ・浮・漢・なる・へ・し・ほ・れ・小・様・の・あを・造て・飾・ふ・同・ま
なとこのころの書ふ・あを・ふ・見・たり・さて・浮・漢・ふ・ふ・なる・れ・の・ふ・ふ
に・ふ・ふ・の・ふ・を・ふ・れ・を・たるなり・ふれ・ち・次の・ま・なり
このふに・ふ・ふ・ふ

ア殺ク殺りなき序代のり来にそつひふ大きゆる巖ときなれうしと
以へるにて商代を統ひまわるなり。うふ。ふさにそうの古今嘉れる
表ら代はちたやちたに汚われしひえ侯となて若ゆ物すゆて
以へをおもふるなるへし。このれしに春をうけたり。さて上のふやうなる
夕書とらくようこれまては八月のそもつうさう。ゆるころのとゆて
あしてまて一段なり

あつきとよのをうきをそのうちハ人をたり。八月ゆるあゆうの侯と
よういうむきちめ。廣上人とよ。はるへきは。これとものうちあてきしのうへ。
對
きれのすのことに。こをうたくまをしつ。ちるなりあるひあうに。ふと
ふえのるなたに。えたもくしきうう人たちのとまあくをひいをやう

うたとをく。おとつけてはをうしうう

扇のをうしくをうあるへきを。ゆふ。あずれしたるを。人をのをてるなり。
をたうふ。ゆちてゆうなり。はて。序奏の侯ををつくをに。よをを。新。廣上
人のこの四方に。ものゆうちゆて。みゆ。よをを。新は。三位をを。ちん
ひて。公卿なり。たゝし参議ハに位。廣。文人は。廣上。蔵人なる人とまて。ものと位
ハ。なに。えよりされとをこのこと。ろうちゆをて。は。四位をん。はるへきは。
はをあるへきをて。ものゆをし。はるへきハヅのよりへ。ものゆ
はトてりバンなり。をしハ。廣。廣なるの。櫂なるへし。簀子は。今ひ。様なり。
ををなりあるひあるに。人をゆれなる。ゆひなるゆ。ゆ。ゆ。ゆあるひ。
侍従ホ。祢よに。いゆることにうんをうをし。和泉守。第長。ゆ。ゆ。ふ。ふ。ふ

はうとをきるきんたちなとは後深あるをひいきやうなるをあ
きせなとしいろんし後ゝをうしとあるいられたるしうんはそか称
といふことは古事記傳卅三に妻しうえたるうこのほう為盛集に舘人
いうあひたるめに人あひうう舘人はすることはこをむなしきをや
くいを称ゝのとまたちをえたるう後の考へをうう師云く今世に
底倉人といふものハ底倉と孤とうゝとのわをひなうこれえめのまへう
ゆるゝ孔にたまとくゝれとも古書ゝのゝ底倉人とあんかはれう
なるゝとをうえるへし これかふなるへしとは大うるかうのの
たをゝれ乃あをひうをなるへしとをれういはゆう奇ハ今称をと
同しんえをくらてきたる一種の奇なうをを奇はをしめうう七五

七五とうてきて平家物語といふ書ゝあをうえたるたとくしいハフエテナ
なう

高丘宿禰 信卿

高丘宿禰なるのふん宰相中将経房 実成卿 為清卿 みのかれなう 済政 はなとして
あ物ゝ孔孔ゝ表をあう

高丘宿禰ハ中ゝ丘宿禰なう丘宰相中将はたを中将をて宰相をうけを
さをいふさゝえ宰相に丘宰相はあゝさきはゝ宰相丘宰相といふへきをうう
なるをうくゝへるハ変ゝに義人ゝ丘をれ監うけたるを丘をう義人の
おうう 続世継に西信下のかゝしたるを西信の西下をてのほうしをなを
ゝへると同ゝくゝ孔ゝのこうのをうをき書き酒なう みのかれハ義房卿に
ておれをうけたるをいふなるへし なをしいこの人ゝをアイテにして道

長公の御ひいきなり。　経房・頼平にて、公卿補任作経房。
下皆効之と云り
さはりのいとあはれはかなおぼすやうにやあらんせはを落さに
さはりの御ひそ上はうなりあるをひとあるうゝそきゝしたる御ひそ
と沢はちよりしたる人々のなりたえを思ひおこして、まかりつとへけそひ。
さうゝうてきのころは志めやうなることなし
はるかに里長さて、枕屋にまうてゝ、人々のは思ひおこしへ
係れり。なるたえは里屋にありて、中宮を仕の給なり。志めやうなる
よりは上よりやうなる名をとへるをとけてこのはそをかしあるを
つとなりとなりこれまてまゝ此ゝ　そのころ、侍平保昌りいと

紫式部日記巻一

○十四

紫式部にて
大六日れたきちのあそせまゝ人々にはゝとくそゝせ給て、酒ゝかなる人々
あ酒ゝつとひたり
黒和を酒合しゝ人々をつえになり。合香の方をと酒抄枝に安し。
この中に黒和合せのとあり。まろは合香をまろむるなり
うへより知ゝ道ゝ兵衛尉、宋の戸ゝちをちゝの殿きたなまはひる新したた
ゝる酒ゝなりゝ。そ紫苑志をゝいろくのきぬにこれうちあゝとるをうへに
きてゝ、ほそひきいれてすゝのはこにはくゝ、ふゝ酒へるひたひつきん
とらゝたけゝなる酒めゝ
うへより知ゝ上ゝ酒より下ゝ酒なる枕局なゝへなり。そ和ゝそゝの酒ゝふ。

この宰相の局のつるなり。戸ぐちハ局の戸口なり。ひるまハ今いと
と同じ。こゝらハ法華堂なるべし。たきしめたる香なるべし。うちめハ御目ふて。
御衣のさはなるべし。ふとれるハ一トホリナラヌなり。らく。たげゝカハユラシ
ゲなり　なまめかし。情味深り。今新にする
絵ようなるおの服装のこちすしハ。こちおほひをいきやうしよのうなるの
女のこちとし。絵へるゝとふに。えあけて。掛るほゝ。宰相の君
なく。おとろうすをのうとて。すこしおきあるう。絵へるほのうちあるみ絵
へるなとこゝろにをうつて。絵をしうつて。ほとゝきとに人の。おりうにま
たこゝろなくをほるゝほなり。久し
絵ようなるとよみ切て。おの服装とゝ引つけてよむへし。ロおほしいハしう称

すとて。神なとを口に霞ひたるなるへし。べちゝ口霞ひとゝをのそ。あゝ人う
らほとのうちの女は。おの絵書ふて。たる女なり。掛るほゝ。掛狂しなり。
おとろうほのうは。をのうほの装なり。おれくはカクベツなり。そしまそ
一段なり
九日。きくの綿を。三箱のおすのもとに。光源氏　とうへ乃とうにていとよりお
以のごひすて。絵へとの絵をつるとあれは
菓の雫。えゝ。ゆえうに神ぬまて。花乃あるしにゆ代を申つむ
とゝ。こしまんとする。ほとふ。おなとに。ふうにまうたるせ。絵ひぬとあれはよう
なほとめつ
九月九日なり。きくの綿い菓にさせたる綿なり。て。源のいそれけるを。菓

に絵をきすゑ、巻の端を結ぶようにしてそうつーの端をよせたるまゝ
あり。ある日、既ひとり出でゝ、道長公の少家なる巻にさせ給へる絵を九
日にその端をよせたるやうにて、或親にたゞへるなく、いとゝ巻のこひすてた
まへとはゝるゝやの巻巻のゝゝろ、ゝれはこの絵にうつるまゝとうすくゝと
よくかーのこゝろはゝるのにまのうゝたきまに以ひなし給へるなり。
すゝ給へゝそうつめるまゝかゝれはのこひし給をすてゝこゝさのなれとう
つーのまゝうすくれそよいつゝゝゝなゝこれゝてゝゝゝめ絵は衣をこいてゝゝどゝう
れゝのかゝのこひゝてまゝをうつすなゝこゝさくにそきせたゝとゝいそれた
ゝ。かゝ巻きゝとは松の巻巻ゝゝたゝゝとれゝけきはゝてゝは者ゝゝ
清少納言の如房なゝゝとのゝゝへゝ道長公の小方なゝ。一説公卿伝に巻の家の家の所如ゝて序ゝ倫ゝ巻の家

まゝこの所この中に絵たゝひゝゝるゝゝゝ

殿の東ぢり（中宮）おまへよりなまめかしはなやかにて、そこにこのたま
（裳）
ものすそなどほころびぬるほどくいこめかれ、表衣などぢりぬ
ぬれ

東ぢりに今をヨウヅリと云へり。そしは簾の端のうなゐてほころびぬるを
伊勢ものがたりにそ、身のぬれぬるほどくくつけてあるへきさまにふるな
ほかの大納言ぬしを中宮の女房なり。裳は女の礼服にて腰に結
ふものなり。いろのぬいかたへ
れひとりにひとりのたきものとりてあるこはせたる。おまへのあるさまのを
うへはぬるとのをれんとなり。そもちくきてちまに
ひとりは和名抄に薫爐比ハ反利と云へり。ひとりは合ておにそをたる

おなじ日のなり。とりてはあおてなり。おまへこそは庭おをれしなるへしん
をとれしは袴をなる云をうるたる袴なり。庭おの菊のまちまへさ
はつをうにうとんのとれく袴をにはひてお房よるのうちくやまに
中になり

まんようをなや師をはきまきに北そ海をはぬうちとく海のるたな
まはうきまちていりぬ人のよはつほにおるて志そとおそひ
うとまに久

中文序文のまつを踏たるとし。俗ようとなる海せ踏よへはうちとる
よそ。昨文。序里の度のうちまれ加物とまるとはきのうたよそ
おまを踏をへり。はるうに外海ハ人へくくはきうしきうちしてれ

えに付てやまひをつかまつりにめしつかひのよふにはべりて、ものたるなり。
上に著の色のことは、ものそをきさ角あるなるといへれさ
り。ふそをとゝは、ぞ〳〵ふそ〳〵、舟たまんと云上にたふう角ゝ神ゝとも
乗中ハ、ゝうゝまゝ、ゝたてゝおしゝるナロのまゝ浮のくとするにはこれら
ひゝうゝる白され帳かうつゝせ浮ゝ、座ゝうゝまゝて、まんたちに位み
位よ、たちさゝゝゝ、ゝ五千のゝうひゝゝけ、角ゝゝゝもゝてちゝふ座と、
ゝとはゝゝ
乗中ハ九日の乗なり、ゝゝゝゝふゝれ乃ゝのワイくイフなり、ゝゝひ
ハゝゝふゝゝゝゝゝ今ゝと回ゝ情浮ゝ室礼とゝれなるハ、
ゝるゝのゝゝゝひゝゝゝなり、白され帳ゝゝゝて、ゝ座乃ゝ乗ゝ浮ハ
ハ浮ゝとゝ、ゝ角白さゝゝゝなゝゝふさなり、ゝゝ抄に、御産當日上下
著白装束、九夜改白装束、倩尋常也、九条右亟相記曰、女房等、
各著白裳唐衣、冷泉院降誕、ゝ座ゝ、ゝ座新新、中宮御産部類記、ゝゝゝゝゝゝゝ、ゝ
ゝ角ゝゝ、五千乃帷（カタビラ）ゝゝゝ白さをゝけゝるなり、ゝ浮ハ菌なり、
たちさゝれ、数ゝ座ゝゝゝに、ゝ浮ゝくさゝれゝゝれゝゝゝゝゝ
日ひゝゝゝゝゝゝゝけにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
日ひゝゝゝゝ十日の日ガナ一日なゝゝゝゝゝ浮の浮ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よるみにつけ物をてなやをたてとをなりそれを行力をもてよう向一
とゝくをの小駒うゝして其のおもをくるをいをするなりてゝのこと
葵ゝ葵ゝ葵ゝ世の石に委しうゝ見たりこのゝの書よりはをうく
ゝ申ことをれと人ゝ世ゝ世をもてなをことをゝ
月ころそこゝさゝゝひるゝとのゝちのゝゝをはゝゝにといをに山て寺
ゝをたつまて三ゝざとゝくゝゝゝのゝゝれくをゝりつゝゝ三よの佛も
ゝゝにゝゝ行ゝゝんとゝひゝゝゝれんゝゝしゝゝ世にあゝゝゝゝめ
しあつゝゝやはゝゝつゝ神をゝみゝゝふりたてゝをゝゝしゝゝゝさゝゝ
この月ゝ作ひゝゝ作よゝのはゝふ行ゝゝたゝゝ行ゝゝ験者は仏法
加持なゝゝて功験あゝゝをゝゝゝ三よの佛ハ三世諸佛なゝいゝにゝは

いゝにゝゝゝとゝゝ行ゝゝんとゝゝゝゝゝ陰陽師ゝ祓をとゝゝゝゝゝ
八百万ハゝゝゝなゝゝゝなゝ耳ゝゝふりたてゝゝゝゝ延喜式六月晦日の大
祓の詞に高天原ゝ耳振立聞物止馬牽立伐とある初ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けるなゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

庖丁をたてて、まんざあつらへ、ぜーをかろう

うちの女房は内裏の女房なり。うつたる人々は、それをちよを帰へ、

ひとりひとりは一雙なり。ようの酒しの一人を一雙ひきつほきなる屏風の内

にはまて、そのうつほまたるに庖丁を建たるかあらうくそよ酒

しよを一人て、各あつうたる俵よも

こはこてそ、むとをかき、俵西俵新、さきうかて、ふぐうえんのいさ注へる

うたちをとよひぜ、あふ、ーそ、へうだのえ、うえ、丁をれれうう

にたるいとうきゆ

むとをかきは一下ホリナラヌ、ヨウイナラヌよりよ、ものよれぞはよいてな

りたのえ、うえのえ、なえ、ぞ、ふえ、ふえ、ふえ、なるのえと

同じこの法師よりの法不動の形をとをそ、一人くかのうえう加

持まるさ面なり　たのえ、うえ、数年汉家にる

小乃れざうしとよ子よりのさ面いとせをえほふに十よ人をのちにう絵

えれはかうける

れ曹司はれ局なり、さ面ハせをさ同なり、この的に巻のさえにまえ

れて、んつうはうーうと巻えすぎて、ほふるうふれそはる猿さあに

十余人かうとも

いまうこしろきもせられに、まあうて、うるうおほえぬやいをはより

をかるんをは中をかこめられに、をのすをさぬの袖ゆつんうたをを

にはうをきれとなとはしのれてなえをとふ

ミしるさハ、ダウゴキなり。書あらうハ、上氣まろ、法とうハ、祇園寺より
なり。中く、信濃のうくんの。中にたなの得る。表、おく、わるる如房の
中におこめ、しぬなり。まつんさハ、せを死ぬと多くおこみたるなれえら
たゝにまつわひるを死ゝ法ゝきれとれゝ中ゝの口乳母やゝ入ん、よな
ゝ。れとゝは、年多ひたる人をゝ。まつん。繫家。中ゝんと
するハゝるゝめ。

十百のあつつきにかのれさゝし。二ゝをゝ。ひ法ゝにうつゝせ法ゝ。ミに
なゝと。えゝみあ、ゝは、ゝ乐丁をおしゝゝきて。おゝゝまた
ひ法ゝ。庇のうゝなり。けあ、ゝ。ハけん。よゝれまにゝなる。ゝ。ゝ。えうみ
をほせぬをゝ。ゝ法ゝるゝに。簾のうゝに。九丁をゝ。ゝうゝと立ゝきゝて。れ

ゝ法ゝなり。

信西ごゝゝて。ゝゝゝづ。ほゝむゝゝづ。ゝゝと法ゝゝて。かゝるまゝ。ぬん保
ゝゝづゝきの。ゝうゝせ法ゝひ。ゝれ。記書に。ゝゝに。ゝゝきゝゝゝとゝ。ゝくゝゝて。ゝゝお
けゝつけ。ゝゝゝゝの。ゝ乃。ゝゝれかたゝゝゝくゝたのゝゝけ。ゝるゝゝゝゝゝゝ。ゝ。
ゝゝゝゝゝハ。信西の名なり。上のゝゝゝづハたゝの。信。記。下のゝゝゝハ。法。務。信
記ゝゝ。法務は職掌。ぬん保。ゝゝと名なり。ゝ。記書。ハこのゝひの法。ゝたひゝゝに
れゝゝ。法ゝゝゝゝゝ。ゝ。ゝの。ゝゝ。法。ゝて。佛小。記ひ。法。ゝ。書ゝゝ。記。ゝ。ゝ。
ゝひて。本朝文粹にゝゝゝゝゝゝ

ひれうゝいとうゝうれしきに人々涙を流すあるはゆゑなくこうなるなどうたてに思ひなゝ様え出せきあへはうるはしけるもとはきこれ奔のほとの思ひまそとなるきはなれはいとゆくしくれと法師とゝ度をうくゝきにはうとも見えはたひうゝ流へしと思ひなうゝ彼その時の名ゝきに涙を浮あへぬゝゆくしうこうゝいとはきあるへきに涙浮あめはいかくゝ見ようくたせそとゝいふ言に女房とものたひとひなゝと彼涙を流せきあへぬとゝ流しとゝ人彼も悲哀の言のゝたに伺ふれんとふくしきそ思きとゝとゝ（このとき玉のゆ猿のそゝ[illegible]ゆくしゝいとゝシイとゝ言）とタイセノナルとゝ言とふつふれへりこは イとくシキゝたゝゝぜきあへぬのせくはものをはゝへてとあるをれよあははゝてとあんとなれとも涙を流せにして涙のはつるをゝ

人まれはくこみてはいとはてちをくうおそ思すゝんとゝ感

京れもてにはさせ給うてはるゝきうれりこの二侍のをとにそはうふ

いとはひとうある人に今ひとうそるゝをはへりこは中文のはなかまになやませ給ふにをうに人にうくゝ人まれはくこゝはいよくはて

ちとゝとゝをうはるゝきはをるきまて中文のはのちうくうゝ

すさうゝふへき女房はうを三侍のうたふとゝ給へゝ

とのうへさぬきと宰お屋くゝのゝうぶれ太丁のうちに仁和ちのそう

はの屋三井ちの内ぐの屋をめしれたり

れ本寺のうちにおいて法師となりをいだしてうるへし。またこの二人の法師たちをもれかおのためなふれ凡下のうちに入きたるなり。ゆゑにその表数千の侍法師済信とに内ぐハ内侍奉ゆゑてれを法師の職掌なり

度のようつかはしいせしれたるふるまひをもめてなり

れむための中臣の和気の法師となれはようつとり内ゐなれはなきこまを

ゆゑとそれんをいれれはおしいせしゆゑ内ゐ

その頃の産の中清まめて者なれはやなりとも

いま一さにかるんを大納言表こかれ表文のなんし矢内侍中務

たれんの命婦大式部のおとと度のせんじよりとそへたるんをのうゑ

ゆゑんを内とそたる第一さきとものいとてとうなるにそこれをなり

ふくほとなるれとたくひなくいとんひとつにれはゆ

一さハ一度なるへしまるゆゑこの式部彩糸の法となれえなり抑

式部のこのゆにそやつえ乃ちめは寛弘三年十二月元旦なり

十八下寛弘四年十二月の和ふ元にのかるにゆめてまわ

ゆをとひのとをうしとて同六年の修ふをとし乃夜ころよ

り樂府とうとうこくんををけなくうをへたて吹ハはを

て侍るをとをたるをとしの夜ハ寛弘四年の夜なれえなり。さて久

しく夜仕へして年深るこのんをのんををとそたるはとうとう成を

たえあるなるほとなれたるよこのあるかのれを振のたひなくいをし

とおもふことなり

またこのうしろのさぶらひたてまつるきちやうのふ内侍のうねの中務のめのと服部君の少納言のおのといとひめきみのこしきぶのめのとなとおしいりてきちやうしてつうしろのほそきをえ人さとほしゆきちひみしろくんをいとのうほなとをえられに

とゝ外なり内侍のうね新中の侍従ふ妍子とて中文の第四こ三條帝北后にたてまつりひのち枇杷皇太后宮とゝ申にたてまつりぬ服部君同しく侍従ふ威子とて中文にたてまつりぬ服部君同しく侍従ふ嬉子とて中文の第五こ三條帝の女御にたてまつりひのち後朱雀帝の女御にたてまつりぬこれを登花殿女御とゝ申これをいとひめ君同しく侍従ふ嬉子とて中文の第六こ三條帝の女御にたてまつりひのち後朱雀帝の女御にたてまつりぬこれを登花殿女御とゝ申これをいと服部君とは宮内卿の君の第服部君とも申へり倫子のれうにてこれをいふ称なり神宮寺にこの第服部君の上をこひめ君とも申てこの第服部君の上をこひめ君とも申てこの第服部君の上をこひめ君とも申て

たるはちまき

いたくさにえうちまきの雪のやうにふりうるをれしゝほそたるさめの

ふるえくらうくんとのちゆるをやをうしき

いたくさはつとひたる人をの頂なりうちまきは散米なり（中宮のれに米をはやうそうちまき）

と法のはれふなるへしはちて御産室にうちまきするとは師うく中宮の産ふやにう

ちまきするとは僧陽師のなにをはちて米をうちまけは邪鬼おそれ

てちりうくなぞはちまるはあしきをのくはちまりれく産の平安なんとを

思ひてのりさはふ禁中にして世にあるうるめしあつめとあるそのの

禁中のまくへのうちまきなり雪のやうにふりうれるはあしきをおそ

つくはるうるかふ米を井戸うにふつうてはけくうちまけはなり

禁中のなにをはちるうをくうけりといれたり牧杖の落葉にくは

しそのをうはは可笑をのをうしなり　うちまきの歌なにる

れいたるさのれくしおろしまりれれむをうけをせまう落ふほとうれをひ

たるうちにはれうなるをうあはは帝うれうきにたひうたせはを落

ひてのちれとは帝さしきほとはそうひろさをや世屋の事のひはしこのう

らんのほとをまたたちをみたる傍さそくをいは俗ひとをうとをみてめをを

はく

れれむをうけをは受戒をうは戒をうけをは落ふをうにれは頂のれくし

をのしおろをは上をうは若某宅に紫上のなをを落ふとをろふれ

くしおろしをんとをちにおはしたをいむをのちうにはをてれいたく

きさらしもうはさみてゐるをさうけをもつ絵とうけらはをそう。
あはをしはアキレタ。キモガツブレタ。とゆふえをて。所きさのをなをたし
きをしたひらにをは所平発ちをしなりのち紙とい胞衣なり。俗
に。後産ゆふい海ひとよは師をく。特ゆ人詞をしてはをのけをうよ
するを特になをしへて以へるなり。いをひとようと後てぬをつくい絵をよ
をてとゆをしとよりとよむにをあるにをのけを今ひとようこうよをんと絵を
よをてぬをつくなりといきゆしうぬゆ額ゆて額ゆて地を突をし礼拝
するはをなり　数年前をやのをし拭うし
ひんしおをてなる人をは後上人ゆ海してたるをしをゆ君の九(頼定)次中
ねにをあをておきれたしはをを後ゆを人をれひいてくをらし人

示面の人をいは女房をなりこのををれに後上人のわたる方に海してたる
なりあきれたしさ海をトハウニクンテウウトリとたるを海を後ゆをは
すきてのちなり
をはちなをのたゆをれくなをあうをを人ゆてあうをきに方をつくりした
りけるをなをれをゆ後ゆとろくぬれををなをれてあはをうをを人
となんををはうし
をはちはは化粧ゆて新なをつるををうなをあうをきいをあうをきなを
きをれいをををしゆを上に脱しる用ををを以へるを同後ゆをいは紅粉ゆ
て化粧しつるうたる新の後ゆぬれををなをれてあをとは以てくををて
をを人をとををはちしをとをあはををうはは以てくををゆはは

、そもいつ細なり

宰相君のうほうそうしゝ法師なとゝ申れとうしたゝ行りしゝう侘し

てれうなりけんさしとそのさはふえしゝ人乃ゝあうさ面のうたえふおほえ

ちやしゝなんうしてうし

宰相君のさ面これとこ中おとれやしゝ申なるをいとうしたそ者ふは

まゝにそなきんなれそしていうはうえんとはこうしのとなりこの

こ中お宰相君なとたふこうと侍て我身はいうなりえんはそえくゆし

うしんといふなりそのさはそあひことい之んうしゝんえんゝもち

ひのさ面なりうたえたゞれなりうしうしてうしゝて中ては イチダンノゴキ

ミテアリシといふなり 鬱憂ゝんまかれそ侍るなり

ゝまとせはを侍ふほとれとそのさまの孫さこ侍しゝうあなとのむくつけは

1

ゝとせはをはしにのうれをはうしゝとあるそ尾ふて胞衣のおく

なりむくつけしゝ名ろしくおとひてゝそにうむ云のある細なり

源げんのうしゝ人こはこんよあざゝ云場のうしゝ人こは侍ゝうとゝ人右を乃

うしゝ人かはほゝちしゝのゝしゝ云内侍のつほまふはちうしゝあうをあ

つけたまはゝ侍まにひさたふされていとゝ侍しううれそ孫んう

くあちりをめしゝくさんてうそ侍しゝう

源花人云場花人右を花人云内侍いつれとうを侍ゝに立なる女房

なりこんよ侍ゝうそちゝ侍ゝ孫んうくいつれを加わの侍の名なりほゝ

ちゝしい音をなり。ひきたほさるゝといこの加持の僧よさのよそ所しに
つゝたるまゝ寄めたるふり倒さるゝなるへし。又はより所しよさの物のまの
なかに引たふさるゝぞいつまにしてとゝいとゝさゝき物のまなる加ふ弱んうく
とゝ僧をいと一人さゝていよく加持するなりいとほそイトシボイとん
ふゝ云ゝ。ぢゝそ。その傍ほふ僧都とゝけるふ。ほる名の僧のあるしにやさゝ
ゝふ僧都とゝに云ひとゝてゝ。ほけるゝ。ほしはひきゝれゝとゝ一人とあれ
ほかゝに一人の名なるゝほゝるきをや
あゝうのゞんのうゝきにあゝにれまゝけ乃いゝうゝこまきなりゝゝ
上の引たほさゝとゝ一をゝけてこの僧よゝ加持の験のうほきにそあ
らまとゝれ物の寄のかゝべつこまゝれなりゝとゝこの所周梨といと律

師とゝてゝとゝ。

宰相、君をきゝふゝんこゝを物へたるに。和一上ゝ。ゝしてあゝてゝゝとゝ
ふふゝゝれまゝ寄ゝゝれとめしゝゝたるゝゝとゝゝゝてほゝるゝ
ゝゝ

宰相、君これまゝゝ所なゝをきゝ人ゝ所ゝくゝ物けをゝきゝさゝた
ゝゝ法ほるゝ人をゝゝて書紀の神代巻に圖造彼神之象而奉招禱也
とある。招禱（ヲキ）これなゝ。又風招（ヲキ）とゝへるゝ同ゝにあゝ置なゝとゝゝへる傍
法ゝゝゝゝしつけおくゝ人なゝはつけゝ人とゝいゝあゝとゝゝゝゝゝゝゝ。
傍のゝゝゝ。和一上はヨガヨヂウなゝ。ほゝゝゝゝゝゝこのゝ所ゝれるゝけ
ゝるへゝ。ほひあゝゝゝの寄ゝ。ゝゝくとゝゝゝゝ乃めゝゝたゝゝたるゝみ

なるゝ[illegible]とゝ[illegible]はてゝこのあゝ[illegible]おもゝのゝをうけゝ　歌[illegible]

れかたゝとに

うゐのゝ[illegible]ふこゝをゝ[illegible]おもゝはゝ[illegible]たゝこゝに[illegible]ひゝゝに[illegible]

[illegible]れゝはゝのゝたゝひゝをゝゝに[illegible]ゝにはゝ[illegible]ゝはゝゐゝゝ[illegible]

ゝはなのゝかゝゝん

十五の年のゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ひなけゝたゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゝゐゝたゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝたゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

はゝゝたゝゝちすゝ[illegible]ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ヨガアケタヤウナ[illegible]

ゝゝ[illegible]ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

あさやゝにのゝゝゝをゝゝゝのゝゝゝ

ゆらゆらふるえしあてをかりつるひるそうれふせ（布施）ぶくすし（医師）おんやし
なとうちくれ出るしあるまふこるろく（禄）ぶせうちふはけゆ度のぶ
なとふきてまりけ者ぶ之へ
うへは倫るかりこては省きて以へり。まちくれ出るし。脇法加持。薬方秘
なとに験あるをふうちはうちくれ出るし。市湯度の俵式は
次ぎ又ぞたり
人のつぶきくふは。拍ぶきやうふるつまとてちうひうきぬぬひなの
れとひきむすび。螺鈿（蒙）ぬひ拍げしうぬてしてひきうくし。あふきも
てこぬうなといひうそいて。まちうしつくろ人
こい。市湯度のまりけふ。市度よのいぶきすうちまなるへし。ふくろつまこい。
当袋ぞのまれ出て。衣服をふ水てつむものなるくれなるう。織出とし
ふへしらさん八今ゆ人書見をり。補物に書見をふれたるをいふなるへし。
けーうぬ今いふと同ひきうくしとは。ゆにけーうぬてしたう。
ぬひをの裏を。腰のうきう引はひたうさはをりふなるへし。扇ゆて
ぬうなとハうきてゆてゆるへくいひはきーうはるをふうを行てひても
てこぬうふふいうてとくゆてこようーまりふ高にうたうにいひうれなるへ
一　歯ゆ年にうーうさぬのぬひものもひきはすひとするハうろうり
ふふのうう度ゆうえやハふつまのまへに。齊信卿（懐中卿）文お夫。書文お夫ちとはーぬふまを
アをはちうーひ行ふ度ゆそさせ行ひてひころうつまれつるやり水つうろえ
せ行ひ人とれれうーきうまこちふなり。んのうちにおりふことあーん人

もたいをはなされぬへき世のけそへいなるうちにもそ家一、はゝにも家そ
はこう孫そ人まうをはるうれしはのおのつゝいろにいつる秋ことうう
なゝ

まんのとは上そそ家の戸ゑ こつほまに名いさせは とあるにちて以へ
りひころそいはそ家のとにつゝひ孫ひしはとふちうそはなそに
うつれたなう家ちまことはにはそ中そ家ちまあまてよろつ中そのれ
ちをとうまなひ孫しつうはなれそなう

源俊賢卿

右宰相中将は 源俊賢卿 枝中納言とたそふれしてだれのすのことにか孫しり内より
れそうしまてまわり既中将よりさた家ふい勢のそそうつうひう一う
はとのはうまうれはたちなうそだひうにおそ内にれあうはそ

奏

そうせさせ孫しろくなるも孫ひけるそのことはえに

内ハ内裏なり れそうハ序級なり 御産部類中右記 に晩頭左少将
中宮権亮實能朝臣為御剱使云々袋先々白織物也云々
同書源記 礼に即以彼朝臣被獻御剱一柄入錦袋以銀薄押窠
文なるもそたりこのようさたすれそち序級使なり こそそうい
は奉幣使なり さてうちとうふをいう孫うをそ一をれハ々ふ九月
十日のうて伊勢人の奉幣ハ毎年九月十日なれハ々ふは内裏を内々日
なれそなり 延喜太政官式に九月十一日行幸八省院奉幣於
伊勢太神宮其使者太政官預點五位以上王四人下定用古食者一人大
臣奏聞宣命授使王共神祇官中臣忌部發遣事見後式 また貞観

儀式九月十一日奉伊勢太神宮幣儀に即日使等従神祇官発
向廿日使等就内侍後命なるをもて貞観儀式に廿日云々
後命とあれは帰るはまはしく侍るのなり式部のふとゝのひたりてう
けるにもやはり師はつゝひとうるとのゐにたゝぐの三事をこの日地うた
つる人乃たゝせるなるへしとゝのたりさてこの神事によりて斎宮の解
禊をもうて後のうつとゝ罪をて立なるゝ序後のあるなり又てけら
らいるとゝろのもてまゐ発せ孫はけらはめよりなり延喜神祇式に
甲處有織乙入其處謂着座乙及同處人皆為織云々また
拾芥抄に公賢問曰明成宿祢答曰織物見在之時入来之
仁可為甲但不及着座飲食聞織由即退出者不可為織乎
なとゝたゝるもて云へ
はたはのをはとのうへはちつけて橋三位つるよりはめのとゝとりさうへ
むつこーうんんうたとて大さきゐんのはゝとつゝ侍つる
祖母の倫なのは勝徒さうなるうは扶桑あてゝ花冠先
なとにも祖母なる人のさうなるゆれめのとゝつゝをつる係
はうのとうさうひとはこの中宮の四方にうは或は遥長公の方にさ
ふふなるはうにむつこーうんんうとてやうてこうたはをれめ
たとにせさせるなり つるる 侍女に市堂殿能作徳子下皆効之
よう
侍中ちむ子とゝ乃朝臣のむすめ〳〵人の妻のものと

これは人々一人の所乳母なり

御湯殿のはしりのもとに火をもて文のしもべみとりのきぬのうへ

ふるきたうしをもて御湯をかる

此湯殿は宮ゐにて湯あミせあることにて七のあひだ朝と夕とに日に五

度つゝあ儀式なり。御産部類にくはしくは西の所少し夕の所湯殿なり。たゞし

きとは衣服令の義解に所云位階おなじ服色を以なるなりとかゝ

ぶやの所と白きれとあひなるにより白きをたゞしきとかんがへて一種乃

至なるものをいふなるへし。御産部類源礼記に廿九日云々始御湯殿云々貞

仲弁自餘聽官各著當色以白袍著例衣上著火色襠等云々同書源礼記又史生属

代佐伯貞仲云々六人皆著束帯白重上著當色白生絹云々同書敦記

に聽官等著當色運御湯殿物具以白絹袍著例袍之上なとあく

をきれそ白絹の袍なるへし

桶

はるのをけすゑたるなとゝ云へしろきおほひしたりをきのくちのうへ

文の法ゝひのをけなるなるのふさて。みすのもとにあるうへ二きんこれ命

婦。ゝう酒。とつきそうめて。如房二人おほをくう酒をたゝしてこれほとに

十六ふあ酒れそ。

藤近光

長源仲信

御厨子

ちゝこれなるのふこれを四湯殿の儀式ふまはすゝ酒をゝうゝ白い熱き湯

にゝゝきほとふ水を合すゝし。今ゝを用ほとにふき瓶のたゝひゝ

さたゝに矢へうたし。十六。初瓶まにとゝのいゝうめしれほとにゝ十六のれ

ほとになゝ。御産部類源礼季記に其南北瓮臺二脚居瓮十六口なとを

えるれは十六を定とする数なるへしされはそをとめる数ふ数れるを破
なるへし　ゆ　繁　所いるとする説へとゆをいふなるへし
四雑　うずゆくゆゆ　繍　裳　ゆとゆゆのをゆゆ
しらつきゆえをしをゆ

えし　伊勢貞丈の安陸奥に釵子ハ宮女ノ髻ノ飾也今世ノ銅ニテシヤ
シトゆコトハ即御釵子也サイシノ轉語也玉篇云釵楚街切婦人岐
笄也まさしく女房装正ノ時ハ垂髪ニテ頂ノ上ニ髪ヲ瘤ノ如ク束る
テ是ヲカブト名ツク其カブニ釵子ヲサス也別ニ冠アリ如此スルヲ髪
上ケトイフ　とゆへるそはそはちなり　呼人の髻髪する事は文武天皇慶雲二年の制
ゆに垂髪（スベミドウ）したるはちをハ後の御神事なる女の子ゆをそなへるゆゆ
中世の髻髪（カミアゲ）をゆ髻髪したゆゆと内ゆは髻ゆをしなれた
ゆ儀のをゆハ於慶雲二年の制の所ふ後ゆ内ゆを髻髪したるなりそしハ宗教ゆ行ゆ
をゆのをゆをゆけるゆゆ髻髪せさせゆゆゆゆゆゆ　俗服の如房ハ後ゆをゆに髻髪す
ゆゆなるゆ日ゆの所服の儀式にゆ仕すれはなゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
髻髪したるなり於懸花大人の百衆考にくゆゆゆれたるゆちにゆ髻ゆけするハゆゆゆは
ゆれなりゆれゆるはつゆなりゆれゆるゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆとのゆゆゆと問ゆく　ゆゆゆ髻に　ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

秘抄に九禁中著湯巻上蔕一人典侍一人也是候御湯殿故也な
とそたり
文は度々さきまく結ひて紙をうへてかぶる衣とゝのゝしらゝゑのなんしとも
まてれさるにもあり
ゑい巻ゑなりとゝのゝしらゝ造りたる虎の皮なるへし虎はさはりてだけ
くこれをき獣なれはそなひなとのためなるへし御産部類源記礼に皇子令
渡御浴殿給ふ御匣殿持犀角虎頭なとゝそたり犀角と虎頭とハ二種なり
うゝきぬゝ川のゝ紙をんをはうゝふを出てたゝうみのすゝめにうたとし
りこゝはうゝたるのうゝるをぬひうゝ
川のゝ松の実なるへし海経は蓬を結ふ大原ふうゝ見なとを結
りたる文なりとあり前後なとにとあるものなり大海のすゝめうをとハ織り
たる海紙をゝのをもてずりたるを面に見せたるをいふうこゝハ裳の腰にて
羅に夜具を備たるなりこれ文のなんしのまなり
ゆゆ君は秋の夕村雨ふりなとを白銀ゝゝてはくりうゝ
たりたりのはきりあてゝ人のふ所ゝくゝ出りなけをハこゝそりを
まんにたるなめり
小ゆゆ君のふをを脱ぎる又肴をそれへるゝ織物は後ようを皇一きゝ
出て物をそを結ふあるゝれは結されたるなりされそりありてとゝ
り人のふをとは張りある物なれそ我々の海ふはゝりをされそなり
師をくをふとりとゝを中書のゝな文ふをれりれとをたるを蝶と書と

なりとぞいふ人ものいふとき夢にそあらぬ蝶そ出られとものたくさ
あてとゝ所ふ如意なるの蝶をてゝうゝとふひなせるそ世のすゝ穴の所
にうける文をそれは中書乃信仰なるを誰もくゝつゝはゝ〜そは小
かれ若おうるのハさうたくて裏のこゝに秋の芋村のあゝをうあたに
とひうふ蝶をのうまゝてつゝうてほけるものにゝなをゝくいとうゝ〜き
さ面なれはまゝ所たゝるゝにそ必つなゝとゝそれたりさそふかれ云には
裏のさ面のゝをゝひたるゝなゝ庵衣をゝそはゝ脱るゝや
度のさんたちふたところ源少れる雅通なとうち面きをなけ所〜ゝそれ
たゝうちなゝさんとあゝゝゝひはちくゝへんちゝのゝうづゝゝ〜んにさゝ
ひはふゝ〜らゝとめゝとあるゝへけきはあゝきをはちけてゝゝうに人ゝゝる

ふたところ数ゝの傳注ふ頼通教通とゝうち面きのゝとむにそたり信
陽師のすゝはかをきひてゝゝゝ若をのせさせ孫ゝなゝゝごゝんハ序陽後
北宮の復分なゝゝうゝ〜らそ信都のそなゝ庵をはちけてハ散弟をあせく
さ面なゝ

文ゝむそゝそ博士巫人兵ひゝろなゝかゝらんのゝとにたゝて史記の一ゝうんをよむ
巫人ゝて兵をゝけたゝ人なゝ史記の一巻は五帝本紀黄帝乃有な
るへ〜御産部類敦訖に卅日乙夷ゝゝ藏人弁讀史記五帝本紀進
自本例一二尺許黄帝者少典之子姓公孫名曰軒轅生而神靈
弱而能言幼而徇齊長而敦敏成而聰明治五氣蓺五種撫万
民諸侯咸尊軒轅為天子三遍讀之とそたりこの文のゝそゝふゝゝてなゝ

へ〜これを序湯殿の儀式なり

つるうつ廿人六位十人六位十人ふたなをふたなをたり

つるうちハ鳴弦ハ弓をひること弦をなでてをなり弓ハ序湯殿

の儀式なり ふたなをハ二形なり はてこの鳴弦のことうくよたけくれうち

しさを面ふるあるうちの帝 毒の序湯殿にもあることなり 禁秘抄

に早旦供御湯云々藏人為鳴弦候戸外云々次典侍取河薬

器抛板于時藏人鳴弦是毎日毎度事也とあるなり こはち

なをにいふのこと

よちうの湯のよをとをあるうちあるゞ〜ひたなをいけるこのは

をせいうやうのうち考 伊勢物語なをもとをひのはうせとうまれの孝経なるへ

うにくいるにずに朝の湯殿のうちの孝をぬは脱うにや又は学つと

りのうちに孝なるあるあるうちハ重々なり 朝夕あることなれなをう孝

行を天子章なるへ 御産部類敦記に予聚讀書天子章愛親

者不敢悪於人敬親者不敢慢於人德教加於百姓刑于四海

蓋天子之孝也甫刑云一人有慶兆民賴之云々讀書了退出三遍

とあるなり

又たうちは史記の文帝紀ををよむなり

史記の文帝の孝をよむこと序表紀にいふる所をよの所に云

紀黄帝天子章なるの孝をよむなるへ この外礼記の中庸篇

毛詩の大明篇をよむと、序発新家に見えたり。なほ、この、はさ
の條りなり。
七月の詩とかるく、よろつのものくさりなく、ものさびしく人のすたれ、文
あひなとはへげちえんにあしきれたるを見たすにより、たすと思ふ。ものを
れほしたるやうに見ゆ
うるるくは、多年かりイりかりとあるを、やたれい、様弾なり。げちえんい
きはやれる高なり。はを堂をえんしろきれたるくひなしをんよりたすを思
にを、師をく、上よりのろきおをふ、人のをくなをを上ををうけて呂ふに、清
光座の光をしてしろき玉よりかる人いまを思ふ。ひる人ふ、繁をもせした
るやうに見ゆ。とろ思なるべしといそしたり

いとゝ抱をたなくて、うやうしきさろちすれはひるはを法くさしれてに
ぬとやうをしひんうしろたれのつほをよりをのほる人をを見れは
いとゝ抱をたなくハ法くををたなきに我身入さたすきなをハほる
げちえんなるをにはしいそんえいとをフワガフなりとよふ高くをたな
くは、フワカフなり。うやうしきは、ハレカヤシキなり。をさくは、アンをなり。
をうのほるハ中宮の御方に、をうのほる人をなり
いろゆるされたるハ、おくをうをきめ、おをうちきとなれは、中宮の御
をうをくをうをとをに
これより以下、うををうけるやうなるををハ、をうのほる如房とをを
見て、或アの局よりの中なり。いろゆるされるハ、樓をを結られたる如房なり。

ちるうに織物とゝのをるなり。うるはしくえミダレズシテタヾシクキヲウトシタル
といふなり。それはをりてゝをくあすれしたるんそれのうてをそこにとゝ
ゆるされぬんをもまきしたるなり。ひたるいろそゝふたり風をきことはせてたゝえ
なるぬこゝあへのうちきにうちそれはたりものむこゝのうゝをぬすくように
してかはをふはあやうすをのをしたるんをあり
を被れたるハうゝ風そしてんをそこにいをき被れぬをたるひたる
ハ弱りたきくしく月にたつはうのあすれそせてたゝたれしく。え
なぬこゝの袖あゝの袖なをを見たなるかたゝふゝしは笑止ナキ
ノトクチとゝふなるうちをそれたりるの。こにゆるされぬとふひて織あと
此るはたるやなれと。唐衣に表衣をとをあれ。表衣に見るは。制外なるへ
しむこんハ平絹なるすくようはれまりゝにキンとしたる云ケシウ
なるこゝなるうゝ内をハひとゝんうちをふかたつぬへし
あゝきををみめにそたるくしくうやきてゞなるぬを面にしたるん
きゝあるゞ文うちきなるゝて。いひあをせたるゞなるをんをとゝ云ひしら
ゝをよきしのほとたなゝきちのはをりゝとえるそしたるんのんのれひ
たるれぬ家ゝきそあゝそにええける
扇の面をあの衣のう面と同ゝんをんゝみめハえるあるんんをあるはキ
モチノアルなるゞ文は行ケンなるへゝ。ゝをひそ年齢なるれなゝをちち
ハ事ホ実にてれは二のをちのんやすきうたなるへゝとある二のをちハ次
乃方なるゝ。書ホ実にうこれをちをゝとゝとある。上のをちハ上の

宮なり。されそれなしとぞ。八月一方中て。年齢の因号なるを以るなり。い
ひあそぜるをは。かの風しはをの。これはひ合せて。したやなるとゆとうん
ひ合せたるふをあくて。人のんくなるとんひしらとうくあつとひてえ
ルは。秋月一やなるや文なるものれやふきを。年齢の因号なるとちは。
かたをにをうとえうえ。たりとなり。人のんれをえるけるとはこの人を
のうたをにおやたしさ風のうれおくれしとなるんのあるそれえ申と
なり　みめ新や一年により
をううきぬのぬひものをは。はるをあて。袖くちにおきくちをし。裳のぬひめ
にあるうまのいとををて。ををれやうにしををうはるて。あやのをんにまえあ
ふきとるのさ風なをは。たを宮ふうれしらを月のあるれにえををしたるをちし
つ。さをくくと。はををまるとえををはれはにうみををうけたるやうなり
はるををは。つふをてにをあるをは。ソレハウレミテオイテといふなり。れき
くちハ。今フクリンといふものなるのうを風あや。ゑるめへし。をるをのいをハ銀糸
なり。ををハ組なり。をくハ箔なり。後の文ふ箔をれけるなるへし。扇とをの
さ風。これはをの扇のさ風とはをて。箔をとうをて。をやうしたるをふを
えし。次ふうををけたるをしなり。扇とは。扇のさ風を以へるなれをなり。をを
くをの下にしてをとををつまをて。えをへし。はををるは。ワコトシカトモなり。
をををに以るは。をのれをなひたるをいたるひて。ををを如房をるのはをくるを
をうやうしたるさ風なり
三方になるをは。文つるはをは。文よりをしめしたるうをやうなひ一をう風

齊信卿

つる。（同上人）右湯つのゑは、れをへのをちん（沉懸盤）のけをん、ゑろくまの出さ〜なとゝえ
しくはえに
ゑに、七日の日の出湯屋のをを、ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜れをへてゝにんなりて、立ゑへり。
三日の夜より、ゆゝは出産育のをを、ゆれいさせり。ゑつゝはを中文の宮人
ゆて、中文大夫より、つをくをして、出産育つゝゆつるなり、まをゝゆゝ
なひとは、ゑを生れを産ひて、三夜、五夜、七夜、九夜、とあるとなり、も
ゆかゑくたる、ゑれ〜ゝゝ、をゝより、あををまりて、出産れなゝをあることゝ。
おをの八中文のおを一にまるゝをのゆて、れをゝ、沉懸盤以下、これなり。
ゑれを中文をより、まゝゝゑをなり。　侍中、ゑつゝをのとに、今案中又
つをにて

後賢卿中納言、義宰相は、行成卿（衣折立帷子、浅包み）、（脇部）衣をのをりなていれ（帷子）ゆゝ、浅包み
（覆）たは、ゆゝたつゝゑなと、たゝ〜ゝをのゆ、（机下）ゆゝ、ゆゝ、ゆ人のゝゝ。
くゑをゆ、ゆつゝ〜たり、あゝゑのゝゝ、ゆゝはゝ、ゆゝゝのゝゝをゝゆつゝゆてん。
後賢卿は、侍中の奥に、中宮権大夫と、ゑゝたり。行成卿は、同書に、皇太后宮
権大夫とあれゝゝ、中文のつゝは、なるゝゝ、又宰相なるゝゝをに、れ出
ゝゝに、これは、実成宰相をつゝゆゝ、実成卿は、寛弘四年、中宮権
亮と、大系図にゑたれゝゝ、程ゆゝにを、侍りたる、ゆゝあり、をゝに
も出り、出れ、侍中の、ゆゝ、侍中の、ゆゝ書に、ゑたり。ゆゝこの二人、ゆゝ
つゝゆ、ゆゝ〜ゝゝゝとは、このゝ人のゝゝ、ゆゝゝゝ、ゆゝ、ゆゝ、ゆ

ゆ——いはれひとみたひ出したあとの——いはれ——ひとの
ゆ——いはれひとみたひ出したあとの——いはれ——ひとの
ゆ——いはれひとみたひ出したあとの——いはれ——ひとの

ゆ——いはれひとみたひ出したあとの——いはれ——ひとの
ゆ——いはれひとみたひ出したあとの——いはれ——ひとの
ゆ——いはれひとみたひ出したあとの——いはれ——ひとの

ゆ——いはれひとみたひ出したあとの——いはれ——ひとの
ゆ——いはれひとみたひ出したあとの——いはれ——ひとの
ゆ——いはれひとみたひ出したあとの——いはれ——ひとの

をぶしにてちうはなりとも。　とき新年に。一本とにいまる考へに
主殿
よのきりもたちまさる事まれなるおこたりにひるの宮なるにてうしてのち
いそうふ本のことにうちむれてをう上をアのよめしんなと宮のまれ
隨身
よもはへおのうきうたらへうめるとふて流世中の光りのいたてたそし海し
たることをかげふれつしうとたうしよおよしうほふ子祝そくろにうちえ
ここてちよけなるや

主殿は。廃中のことをとりこうなへ官人出て。とき一火うを宮等のことを
ゑ司る職なれは火をれきて。たくを織につきてひるのやうなりとれへり。位う
うのことをへにえたりをるいを身へ係れり。世中の光りい宮子沛誕生のことなり。う
げにそうちくになりいつしうきいをるなるの生れ出を後へうしなと宮う

に。他身よれうまてうちくに品ひをうしを。今うく宮を生れさせ後
ひてはしうの品ひしうものたよれ彩ふ。歩きこてちよけ。ありとなりそく
ろは。伊勢物語ふすろなるめを入ることふにとあるを。師の新釈ふ。ちそる
海しきめを入ることふてきて。大和物語ふすろなるまれふなにうものれ
ほくたまきんとふへうとは。ちそを。海しさまれにとえたとよくうなへり。とふそ
れしたるにようは。おうにをなへ。他身をとやりのまれ。ちそ品ふ海しそを。れ
品ひしうものおよれ。教にそのうをなへ。れそろまろ。同しとうへ。れのう。
ハうなへうに。衍なるへし。
そして。度のうちれ人は。なにそうのうすにしもあへ。ぬ。他とをなとそ
ことはうとれくこしをうちうめてりキちうひ。ぬきうけなる。海して。とれ

にあいらはなり

中てい内裏の官人ふ常へて、これ殿の家人をゐへり。こゝをゝ殿内

北とのゝ北とて、そらこゆれちうふさ酒なり。ゆふあい敷そ、おれ

陸奥と同ゝ心さなり

たゝのまゝ、女房八人、ひとりをにはゝ捧きて、みあげ、ちゝさと

ゆゝしくて、ちゝきれん盤もてきゝ酒ゝ、ゝこよしのれ酒なれば、交内行いと

ゝゝしくあさやかなる事たゝふ。すゆひきえ、たゝみのはゝうば、

つまゝとあゝ酒ほゝきゝ酒ゝて、あゝきにてつれたゝたゝめなと、

ゝとさゝゝに行ゝゝゝゝ

たゝのゝ庫膳ゝ、中文のおまえにまるなり。ゝゝあけ、次ゝとえゝて、陪

膳の女房は、ゝゝ盤上ゝ取なり。ゝゝ酒ゝに妻ゝくゝゝへり。ゝきれ盤ゝたゝたる具

なりゝれゝゝゝは、陪膳の女房ゝ中に、むゝとあるをいふなゝへゝゝものく

ゝはモツタイラシキなりゝそえゝたゝふに、えゝたり。盤のはゝうは、河

海抄に下場とあり。盤のゝりの系乃ゝ酒をゝゝあゝきにゝゝ酒ゝはゝ

ゝたゝ扇の端ゝゝつゝたゝたゝゝゝゝ

立（よくのぜう平のふしとかたちなどをうつさるる人のうへりにてはしむるひつ
いひくん人の心すめなり）たちなどをうつしてはしむるひつ
つねとたりたるーふとうるひて後ゆりしらまれそおとのほかるとてゑみ
あくることをすゆるをうとてさうぬへき人をえらせ給へるーを
ふうしふみーとうれへなくなとゆしーきほてきえゆりし
うるをうふ女房の儀式のハレカミミキをうなりはうるにはうぬへき人をを
えらて信勝の役を勤めさせ給しうなり　ふうしふみーいこの信勝の役ふ
えうえれて髪上なるを美き女房とをとちにはうくるふしーさとく
して　ふうしふみーとイさくミキまてうはへなくなるーたるなり
れ丁のひんーおとし二酒えうにせよ人みなみたるーふをのまをいて
髪えねなるーかいぎのれたものいうを（米）ぬーとをあるとくちのうたふはゆと（女）
ぬ（殿司）ぬ（掃）

ぬ（殿司）ぬ（掃）

ぬ（殿司）ぬ（掃）

に

えねはえうにえうひあるをふへり　威儀　序勝ふ女房に　序奏部
彩ふ奏しそのは役て東おとものうあるなりたてーふとは屏風又は御勝
の序奏なるへしそのうーすえうふ威儀序勝をなり　いき　装束にはる
東ふうるはに月のうはなれにうをめよひとうきくーあけとのうふ
ん（司）ぬうーの女官のうほとをうぬをう

きくーあけ　うるふ女官の名なるへーー　台記の別記ふ久安
六年正月十九日　禄法　女官　禄　内侍所　去々　理髪（カミアケ）六人　各六丈　紬二疋
去々　えうたるうれうるへーー　一本にはうーあけうん　をうは屏（ヨリ）

にておあるのつまりなるなりと給本箱いまふて

闇司 ちうとつかさなどアのまれふやあ〜んおろそうにはぢぞきけさ〜しつて楚

籌 ちろのうんはし・はなはだ〜しきまはしてごんでんのじんりれそたたの

れ戸くちまてしいまとなくたーこそかたしい人をえとほうようえに

おろそうにそおの女房たちのいそ〜くはぢそきけはぢ〜したるにうくへてこ

ぶ〜うまはをふへうなり・はなはだ〜しきまはいはぢ如官ともれ髪あけて

おちろのえはしーたうまはの・儀式たちてまたくーまはなめをいへ宮藤原

は・河海抄に書宮の居所なりとあり　倩かじんうの廊とに今繁年

一年なきにより

出ちのまかりまて〜如房こにのまとにはそかたりほうけにまーくとそきこた

御中にをおほーしさふれおのの・裳うーきめをーほふのこ松ちーをぬ

ひたうまはふれとをうー・はなーしまふいうちのくのうまれめ・ちのくせんーよ

大武殿の君名宣旨い官名ふてこれ殿の内にを仕の女房なり

たいふれ命婦いうーきぬいてよ穴れにをを・ちろうのんーてんとあはち

やうにれほうこにすりたうはぢちえんなーぬよのうーめやにろれ

まふれほそおすきうはのきとはせにーてあるを出りぢちうんなーぬい

きはやうなーぬなりめやにーいふくうーぬなり

兵内侍のふ・ちろうまのすそ・露をたてたーはは・めーーぬひをつも

松うえのよそひおこあーうきをたるんをへうとくー

ちろうまこれは銀泥なるーー・涙涙と露を銀泥ーーすて・松う枝をぬ

ひものにしたるなるへし。されはあるときをたるよみ人しらす。ときしらぬ泥の雪と。
糸の松とにとまるなりかとくしはりハウナといふそしらぬ
たなうめをみて
おのの花もとのふるふはおとなるゝ雪のそくをひとくつきしろふ。
おのれとしらいふをたゝうとすけをつかいかとそしらぬる人なり
そくハ箔なるへしつきしろふはつきアフにて雪の花のたとりたるを如房と
きれつきしろひ笑ふなり。ふる人ハ古人なり。年老たるをいふこふを。
この屋の内にをしたのあ房なり
その夜の山ものあるを屋のいとしんふえ世間ほしくれそよおのるゝ
れひとふをたしあけてこのせにそうめてたきとをたえ法師をといひ
ゆうしらぬあなうしくとゆ花をはたきて上をたしすてゝよろ
こひゆう〳〵
夜屋の傍死を銀情によりの傍ハ二間に俳するなりはゆ傍のとなり
とありこのせにとは法師ハ為せ極楽なるのそたきとをれとをるもの
なれはなくめそたきとい愛痛事にて愛へきとのすくれたるをいふ。
そはれちのゆうさをよりお房とをれたるをきはゝしたるを雪なをい
ふあをしこのあなを鶏きの声なるうこはオリヤホイ。モウメイナイとい
ふをくしゆ花んを我形をあるゆ雪をはらたへエおきてはおのるゝ
をのたくひなきをえてまをすしよろこへうとなり
うんたちめ夜をたらしれそのうへにをかり雪をそめをすして撥う

ち法ふ紙のあるべきいと面白き事ども
はべるに、屋のいぬ隠ら又は池乃中島なとにうけたる橋ら、たうらハ出羽音
はとふあるは絵ひうとはかとし侍中の歌書にはべるなり、すぐろくはと
と吹ゆ初雪まにうんたちへとをそしめまうしだうち法ふにう
みのほとりのうんきにてらうとうそとはべるなり、紙をもちふるときな
るへし、面白きはムホフナといふこなり
女房はうつきなとあるおろかにはてゝきなとくちく思ひてろうる
めつゝしてひうはしるゝさうつきいはちなうゝるゝ代もめくゝめ
女房ハ女房なるうきてよるんして盃なとはし侍ひて云ふあなとある
おろかにはべうえいそんうゝもやよ面んなとうろうとし面つこうふをよめ

面なゝ一二白ハこゝ白い空る侍硯のとなゝ三四白ハ盃に月をうけ持に月を
かうけて空あを月にたとへまうて歌ゐ代をとを酌るとれくて月なり
ら一枝おそ一面すめとふ名なゝ月もをとは滿なゝこの歌後拾遺
集賀歌に後一条院うまれ給ひて七夜に人ゝあつまりあひて女房さ
うつきいたせと作りたれハ紫式部とそいうたり、仮書のことに月をなるは
面とたうハ撰者のんしらいなるへし
四条大納言公任卿にはしゝんほとうたをはちるよ北にてことつうひよういひ北へ
しなとそのあらそ一法とふとはにはくて最いとふけぬれそ光より
わさまをとて面そ侍ふろくとうむうちめにそ女のちゝ枝くにはそ
れむつきやるいたゝん屋上の白位ハあそ一うさ古位ハはう面一きさ

え一

侍中に大を中納言(ノ)公任卿はなにとにさすれ源氏物語おあ
たの書に又てこの人のよりいと名たかしけるにきいてんとをんつ
ひしたるなり。ものをはけるよりにてきとハよみいてんかのよりあしき
はソレハソレミテカイテ。そもこの君にさしいてんかつひたくはえん
ひのへしとなり。さのもはサヽヤキなり。あをけてはかをにをなり。
彩子にとりもはてさとうけり。てらしてにをはなしいけていをなり
又の夜月いとたをしろくころはへをうしなふ人は。永にけりてあて
ふをこなるをうしをたをしさ面にけををたるやたいをこのほとくもり
なくこゆ

又の夜はその翌日の夜にてこそは九月十六なり。ころはいとあはれなり。同伝
をはこれ白裝束なるをうへはうに。髮のほとときはやうにをゆなり。
小夫。源式部。京。侍従。あせちの典。右をぶ。源経房卿 ぶ。小ちんう面やすひい
せ人なとをしちくかたるを。九宰相中将。敦通 度の中お君いさなひいて。
右宰相中将をたちにさをけをせて。永にのせ給へ。はすりと面り
てさにふうやはしくやけんとみいたしいてかたり
永は。底ふの池の面なりまてはコウリトスケテトいふえんはにくい。
シカシナカラなりとみいてのとい外をて。外の面を見いたるうえとはう
をとのをいるうにいれ面れてのとをたをたやうなりに。給本篇八衍う脱
張なとをるうといまれう。 教通。彩の傳注ふ。敦通とに

いと白き衣に月のひかりあひたらずたゞたちたるをうきまでなる
白き衣ハ云ハかなどしきたるをつかなくしまさ白装束にぬしたちた
る女房よりも衣にたてるをうくるべきかまでなるハ御なりの御ぞなるべし
陣
ふのちんにゐる間あるべきかとつかはしたる人はらへ人よりなりけり後三位をそしめ
にて行法命婦ハ後ハ命婦うちの命婦たゝ命婦ハ式部命婦也命婦
婦なとそ笑へ侍りしくそしくえさらぬ人をなれはひらとも侍んし
ふるの人ことをとひいりぬ度そかはひて御にとゝまれ給ふ
てをやしたふれ給ふ御ぞ侍とゝ
うへ人はつまゝは度上人をとよまてハ内裏の女房をゝひて後三位ゝ
ゆゝれなる女房をとは侍なるをハうへ人とゝるにやうちし御ぞ
なり法ふをたゝをしうゝれはえさらぬ人をとゝへり侍今この序方に
侍りたるにより衆の人をを内へいりたるなりをとひそアワテ、なりにま
しをふをそやしハけまし死かふをのはまし死の侍にもそやし
とつ人をゝなりをこの女房をハ衆のためをにをのれるなるへし
七日の後ハれはやけのはゝふやしかひ花人火的道雅をはけたひそ侍
うにくうきたるふをやなんをにいまををれりやをを一侍上勸学院
式部よりあををしてをかれるをまをんのふをとよ又けれに一侍ふをく
よを侍上へ一ことひのをを死ハとにをはりををとくしくをしる
おにはやけハ内裏なり御ぞをうをるをを月孫なりやををはこをり
スグニとつをゝなり御ぞ侍今の部書にををたりこの侍の完よをに

糸賀にてまゐらせ、ふを空にあぶり儀式、御産部類記中右に、六月二日云々御産五夜也云々此間勧学院衆参賀東中門辺云々又同書源礼記に撰吉日依御参上多用三五七夜等なと見たり、あゆを
してといまゐらせあぶり、俗になとゆるをもふ、俗にの舞に練歩、徐歩を
とりてとゝたり、見糸の文は、糸賀の人々の略名をうたる文なり、けんに
ハ中臣に中にとを、啓にとりふ、空にあぶりなり、とにまゐて、ハ世やけりの、
ハ産育なれなり

ハ丁のうちをの、ゆきまゐりたまはうくるのやとまゐらせ給ひ、ふ所ハ
しきれ糸一たをとゝさせ給ふ、すこしうちなやされもやせて、ほなる
こまれるあり、あつきあつ、きまりあくたるうくしけなりちひさ燈
ろをれ丁のうちにうけたれハくをまなたかいとしきれいろあひのそこひ
そらにきゝなるにこちたきれくしはゆひてまゐらせ給ふをなりけ
りとれも

ハ丁ハれ帳なり、ほの紙ハほ無にて、空所のほとなり、ふ所まをきはは
光はなれはなり、ほ屋とのこまれるはギヨミンナレルなり、あるかはかまくれ
まりなきさ所なりいとしきはイツワカラベツなるなり、こちたきはギヤウ
サンなり、ゆひていせの屋とのれ儀式のあひさなれは、空所も、螢ニ忍所
を給ふれさ所なり

うけ所くさいとまゝなれは、元結をうきつけ作り成
うけ所くさいそにうけてゆえを忍れおほくとふ名ほなれなれ、今ほ

とうたてゝ中にかゝと及ぶ事なれとゝ云ふなり。さるを、ゑにうけるハん
たく省きて書るとなれなり。されいとゝ中なとは、えゝうなりてけ仕
らぬとなり

れほかたの事ーとは、百のおれしどうんたちのろくは、こにのうちうおさ
うなく、文の中をとゝていつに、度上人、所ゐたりをうしてよりてうお
ほやけにろくは、大袴 被 ほうちきふすゆこしにしなとまんの社仕けゆ所へ

おほうるのハとまれの中を青のおうるのてをなり。百ハ先日にて、み衣の
儀式に用ゆるなり。所ゐ花人、所なるへし。社仕けの孫ハ内裏より給ふ
孫なり。こしにしハ、絹なり。裝束を被(カウ)けとおとゝ同しなるへに

て、後ろ、やゝ腰にまたものなれそなるへし。社仕やけゆ所ハおさ所な
らぬ、宮仕りたるれ人、ほのとほうなるへしとなり。　所ゐ、新中の情

注小頼定道方とに
れちつけつゝ仕つゝ。橋三位(徳子)のれくゝ、あまんの女のほう社くに、たりまと
れほ社なゝうゝて、ゝろうゝの衣をゝつゝなるとやゝて、ゝろさにや、又ほをゝ
たるねゝてなとゝゝて、ゝゝ、ゝゝは又ほうに
細長ハ、河海抄に、幼少の男女の長するものなるとあり。ゝろさにやうて
ほあゝんとつゝとをいれて、ゝへし。ゝゝゝは又ほに、係ハ
ハ。人ゝ、ゝゝほうゝゝゝたり
ほうゝゝゝうゝハ白裝束をうて、つゝの裝束ほなるをゝ、たゝし、おにれ

たせる河海抄の文ふは九条にうるさしなるをそれ八月とそこをた御
座部類源礼記にを五日庚辰々々早旦撤御座並御几帳御屏風等
供寿常御装束公卿座屏風等同被立替とあるい六月あるに
て皇子誕生より廿八日のことなり六月にされば河海抄の説ふは
誤りあるべくれなるれども九月にも八月にもうるいをうくるを為に
たひていさうのたうひめはるをうへし
九日の乗い基家頼通卿おそつう為つう為つ白きまづしひとまひにをゆう
するなりぎしいとう為とにいまめらしい白うまの出衣をそ九ぶをうちぬて
てほうらんなとまのことなしといい為めらしうて為うにをうをとうまれ
ちてはうきひつうにへきにをあつめ為つ絶うまろけれ

いふめりしい古代ナラス菊やうなるなるうちれてといふ人せにかかしといか
てそうそれふるうにほおたをひを同さ為にや後をそこのふたに
あーてにうちぬてたるはとるをたり彩めへしほうらい菖蒲菓山をり
そのうたを造りて為後なとふうされるをふうまろけれといふ為
菖蒲なと宮為ふるとなれとそれはやなにいまあーうて為うにを
うきを菖蒲とうえなちてはそれそうくなうといひつうにへきに
とあめうをふるしまろけれとうをなーふて ほて 泊のれよをあ
をまろーとは出るなーといそれ
こをいはめてうちきうこの五丁まんの為をうえにき
たりめつーしくんにくを為ふんてうをすたううきぬるにつやくとおー

さたして、そなたなる人のすがたもあらにそなへなさしけるおもむきのおもと
とりて、人のそばこ作りし事なり
桁五形の垂下に白木丁と建てつれなり。はしさ、まゑのまゑとゆめつ
しさいせ東さての白装束をこよひをこたるなしさなり。ゐにくは、
カラユカシキなり。おほめんては、色メイテなり。ずれたるさい、唐衣より透
とほりて、表に出る法さ、ものゆめつやくとえゆるをてゑだしをたしは、
てゑりしこ法て、あをさかなこたるお方ようなり。人の姿のさやう
にえゆるいこよひしさ、そくそたちのすがなり。そばこ作りしいこのおさ
との。花うもしさとのあつしなり。さしとそのようをうさしはなたの花と
もうたしさて小とて、三東さてれ東さてのようをうけり。　ちちき

ちこ、ちちきうきとに
十月十よ日さて、ゑ江ゑさせ法さ、ホーのそばなるたをにるよひるもはふ
らふ、度の東中にもあつうきにをさかつ法ひいれめのようをひきは
うさを法ふにうちとゆて手なるようれなをは、なたんをなく、おを出したと
ろくもいようんとはしくこ事
さてふふ如房をなり東中晩いこれ人れちうる法をどーうん
にいれたるとふはいつとうをなておするをこの法の雪ようる出り。東中
晩ようさいさてこをなるもいてれのようきいだ乳をのこをまんとをなり。
おを出せておにど。　いとふようーーにる
んをとなれれをようをうんをやてさうこくしみ法ふをこをうに

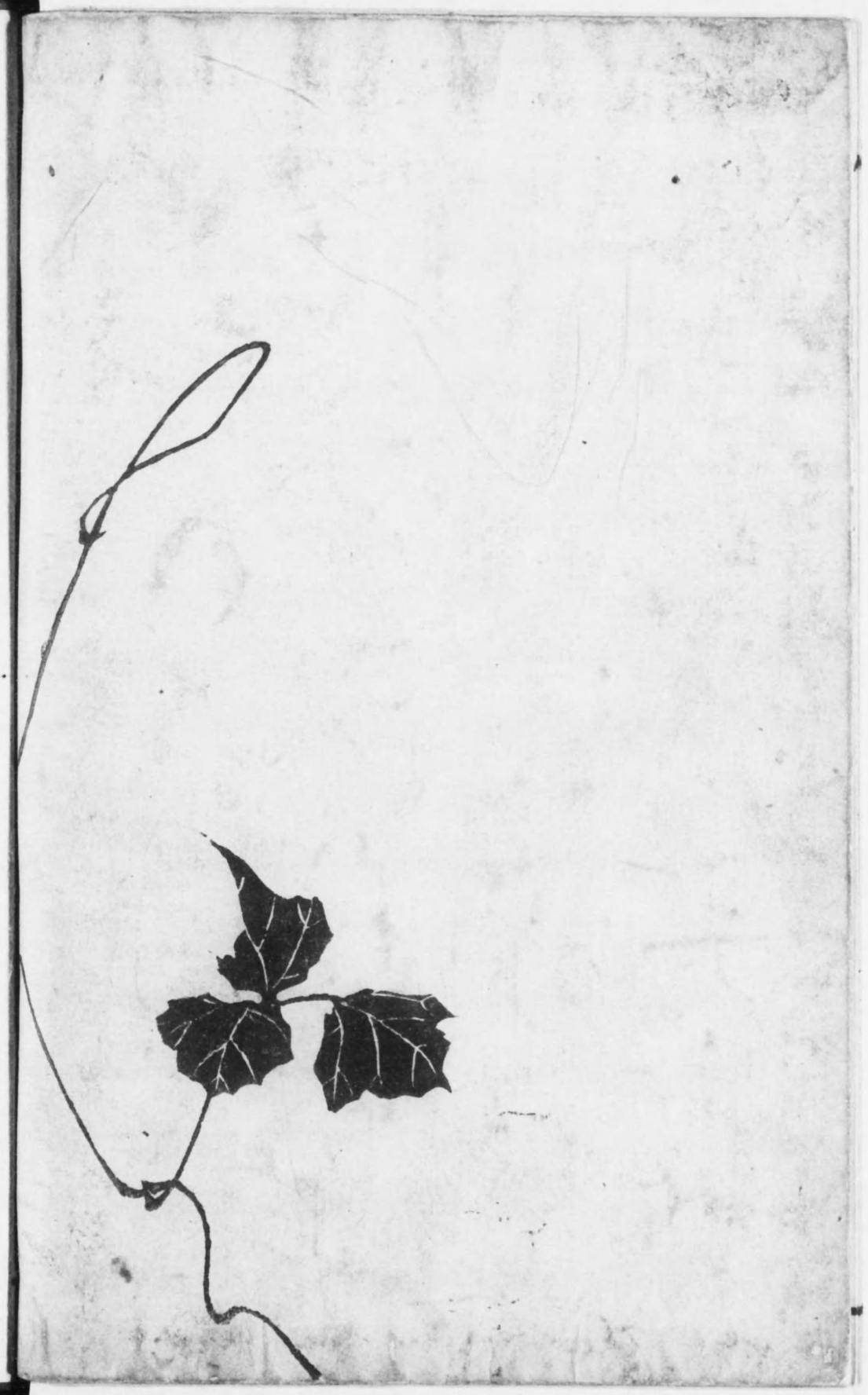
めしたゝ　あるよりたはしうなきさまにおもふ人をまつ侍へるをいひやりきとて
れはかりのうしろにておふてせ侍ふ　あそれこの文はいとにぬるはかりし
きさまにあこのぬしたるあづまうを　ひとりなることをつゝしとよろこをせ侍ふ
ふのとなくいふきこゝろの中をにとのそめをれふ河内て　宮子のいとをさなた
れはとをひふうんをやてはるをさなれはとをと道長公の四ろうう
されんはは十分のそにはをふてう二てをいふつてをはてれつ
きうつを侍ふなうてのめてたしいうてい慈する云はもる云ふふ
めたしなうとうにめたしそなりこあそれなうと慈しまく云
なうなきをはそれをしみけ侍ふとなう　をとふ児の屎をとり
うつはお殿義孝にてれはいあのしとにぬれはひめるをいぬとはなと
文の四ろう

もたゝ　ひとなるいうれしふぬれ又あうなう侍ふをこの文
されたふはひとなるこちにとなう　このぬれたる新中家による
具平親王
中一ろうの文ろうされをれんふんきて　ぬなるのんをせる人とれはし
てうたゝを侍ふを　はをふんのうちいひやをとれはう
具平　新えい村上天皇第七の皇子なうれんふんきていは道長公の四ろうれ
なう　をとされをうい初花をにうはふとふとの三位廣九条殿にをうせ
侍ひふうをうをうはにとのくを条殿をはをきんをうけきたち
笑侍ふをろくあれをををうをたかしめはをあはとに　をで
うの中つをの文と笑さはるふをおうをうをのせんこんの四七の文にはうを
ををうれ中より四七侍ふをんなをやをとをろををそのしめををやえなうはう

一つき咲くさと侍ふ。その天の長歌のを、人侍り咲く所、花と
の花こしめ一ていとうたへけるきとなるとうしこ侍り咲くさせ侍ひて、とみ
えて、次に、歌通云こ抜れむこになる侍ふ十えてそこは完に六年のこと
なるをこの注とよりや中務卿の、けーきそを侍るを道長公のうしーと
おけて、式部にうたへをせ侍ふなる。人とはこの式部のいとこの伊
祐のるの頼成といふい実は、具平 親王の侍るなる加なしをなる。侍中抜紫
女系傳の本にそさ尋に出て、見しかたるといそとふつそて、くさ〳〵あ添へ
ー。又大後小、弓松屋のうへ抜れさ〳〵如云抜、具平 親王の侍るの、師房云
にまゐ侍ふと云こたしと、師房云い兼保四年うせ侍ひて、そ年七十余
と大系界に云こ侍はて。 寛仁元年 紀侍るにて、時代たうい出ひそうへうに

國立圖書館
昭和 24. 3. 29
寄贈

915.35
SH49



落